

ステークホルダー参加型復興計画策定手法の構築 小千谷市復興計画策定での試みー Recovery and Reconstruction Planning in Ojiya City

○ 牧紀男、林春男、田村圭子、立木茂雄

○ Norio Maki, Haruo Hayashi, Keiko Tamura, Shigeo Tatsuki

This paper deals with disaster recovery and reconstruction planning process in Ojiya city which was heavily impacted from the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake Disaster. Disaster recovery and reconstruction planning is a process of compiling ideas or visions of impacted people into a plan. Two aspects of planning, how ideas of stakeholders are compiled into a plan, and how a feasible plan is established, will be discussed in this paper. Strategic planning scheme was used for the planning and recovery and reconstruction plan of Ojiya City (draft) 1 which consisted from 1 goal, 6 objectives, 31 policies and 72 programs were established through five stakeholder workshops.

1. はじめに

本論文は2004年10月23日に発生した新潟県中越地震により大きな被害を受けた小千谷市の復興計画策定支援の事例から、ステークホルダーのこんな「まち」にしたという「想い」を1) 如何に汲み上げ、2) それを復興計画という形式に整理するのかという、ステークホルダー参加型での復興計画策定手法のあり方を提示する事を目的とし、1) どのようにして実効性の高い計画を策定するのか、2) 如何にしてステークホルダーの多様な想いを計画という形式に整理するのか、という2つの観点から小千谷市での復興計画策定プロセスの分析を行う。

2. ステークホルダー参加型で実効性の高い計画を策定する。

(1) 実効性の高い計画を策定する

現在、計画の策定においては「戦略計画」の枠組みに基づく計画策定が主流になっている。戦略計画とは実行性の高い計画を策定するための計画策定手法であり、その特徴として「・SWOT分析と現状分析からスタート、・使命からブレークダウンした目的指向の計画、・プログラムの網羅性は指向しない。限られた資源をどのように振り分けるかという発想でプログラムの選択が行われる。」である事が挙げられる。小千谷市の復興計画に際しては、実行性を高めるという観点から「戦略計画」

の考え方に基づき計画の策定を行った。

(2) ステークホルダーの多様な想いを計画にする

被災した人々は、災害による社会の混乱が落ち着くと共に、自分たちがこの災害からどのようにして復興して行ったら良いのか、こんな「まち」にしたい、という「想い」を持つようになる。しかしながら、個々の「復興への想い」は、言語化され、それが復興計画の策定主体に伝達されなければ計画に位置づけられる事はない。復興計画策定の最初のステップは「復興への想い」を言語化し・計画の策定主体に伝達するという行為、「アイデア生成」である。ステークホルダーが生成したアイデアはそのままでは、ばらばらな個々のアイデアであり、計画とはならない。計画とするためには個々のアイデアはある構造にしたがって整理される必要がある。計画作成の第二のステップは「アイデアの整理・構造化」である。

ステークホルダーの多様な想いを計画にするための最後のステップは整理・構造化の結果について「合意形成」をとることである。「アイデアの整理・構造化」のステップで行われた整理・構造化が、自分の考えるものと異なると場合も考えられる。小千谷市の事例では各ワークショップの最後に、当日の作業の成果を共有し、参加者全員で承認するという作業により「合意形成」を行った。